

古典の世界

5月
No. 1

東寺と都

枕草子

京都駅に近づくくと右手にろうそくを立てたような京都タワーと駅の左手に五重の塔が見えてきます。これが、東寺の五重の塔です。この東寺の西側が、平安京の都大路の入り口でかつてはそのむこうに西寺の五重の塔を擁し、この二つの大寺、東寺と西寺の間に羅城門がありました。芥川龍之介が舞台にした「羅生門」です。この門をくぐると朱雀大路と呼ばれる都のメインストリートが大内裏つまり御所まで続いていてさらにびやかな衣装をまとった貴族の乗る牛車が道争いなどをしていたのです。

この朱雀大路のあたりを現在はJR山陰線が走っていて山陰線が大きく左にカーブする北側あたりに二条城があります。そのあたりが昔の宮中になります。当時の面影といえ、二条城前に現存する神泉苑くらいしかありません。この宮中の中で女房達の平安文学が花開いたのです。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山降、少しあかりてむらさきだちたる雲の細くたなびきたる。

と枕草子で表現された夜明けの風景は、東山連峰一帯を表し、

秋は夕暮れ。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに鳥がねどころへいくとてみつよつふたつみつなどびいそぐさへあはれなり。

と描かれた西山は嵐山、渡月橋あたりでしょうか。太秦のあたりはそもそもが秦氏が干拓した京都の湿地帯。現在の広隆寺や映画村のあたりには、湿地に住む餌を求めて雁などが飛来したのでしよう。それが、内裏から見える。あたりを遮るものは何もない世界が思い浮かびます。

夏は夜。やみもなほ。といひます。光のページェントです。灯りがほとんどない暗闇の世界。そこに蛍が飛び交って光の演出をします。

冬は凍えるような京都の寒さに炭をおこして御簾から御簾へ飛び交う女房達がいま。

今は、その大内裏は廃止され、当時の後の実家になる里内裏が現在の京都御所です。東、東へと京都の街並みは東へ移り、洛陽と呼ばれた、内裏から南に向かって朱雀大路より左側の左京が京都の中心のようになってしまいました。「上

洛」とは左京に入ることですが、それが京都にのぼることを意味するようになっていったのです。

天の原 ふりさけ見れば 春日なる
三笠の山に 出でし月かも

奈良公園内東大寺から二月堂三月堂に向かうと若草山が見えてきます。先日の新聞でこの山焼きの様子が報じられていましたが、この小さな丘のような山を三笠山と呼びました。

天の原ふりさけみれば・・・大空を遥かに見渡すと、今も月が美しく昇っている。ああ、この月は故郷の春日にある、三笠の山に昇ったあの懐かしい月なのだなあ。」(学研百人一首辞典より抜粋)。

作者安倍仲麻呂は、十六歳の時に遣唐留学生として唐(中国)に渡りました。大学に入り、また役人として玄宗皇帝(ゲンソウウコウテイ)に仕えながら学問を身につけていきましたが、遣唐船が来ることになって皇帝に日本へ帰ると申し出たところ許されず一人唐に残ったと伝えられています。気付けば五十四歳。

この歌は、仲麻呂がいよいよ日本に帰ることになって、友人達とのお別れ会で詠んだ歌と伝えられています。

刀などの土産物屋が連なる若草山の空に昼の月が見つけられたら幸運です。